

定家所伝本『金槐和歌集』の旅歌

——伝統の踏襲と独自性——

今 関 敏 子

キーワード：歌枕 都回帰 東国 詠歌姿勢 配列構成

要旨

定家所伝本『金槐和歌集』旅部は、周到に季節が配分され、和歌と和歌が連鎖して配列され、恋部から旅部へ、旅部から雑部へと、前後の部立にも関連付けて構成されている。

秋に始まり、冬を経て春に終る構成には歌数も配慮され、秋の旅と冬の旅の配分は同数（11首）、春の旅2首。末尾2首にいたるまでは題詠と屏風歌で構成される。東国を舞台にして詠歌内容が一転する実詠の春の旅の配置は実に効果的な末尾である。

京の歌壇から遠くに在って、独学で和歌を学んだ実朝は、羈旅歌が部立として定着した『千載集』、続く『新古今集』の時代の息吹を受けて育った。しかし、東国に在ることには限界がある。また一方、東国に在ればこそその新しさを生む可能性もある。それは旅部にも見出せるのである。

1、はじめに

陸奥にまかりける時、勿来の関にて、花の散りければ詠める 源義家朝臣

103 吹く風をなこそそのせきと思へども道もせに散る山桜かな^①
『千載集』に載る実朝の曾曾祖父・源義家の歌である。春歌下に収められるが、陸奥に赴き、歌枕・勿来の関に到った時の、実詠の羈旅歌である。吹く風を「な来そ（来るな）」と止める関だと思ふのに、風は吹き、道も狭しと山桜が散り敷いていることよ、の意の叙景歌である。

義家の勅撰集入集歌はこの一首のみ。曾祖父・為義、祖父・義朝の歌は残されていない。

父・頼朝の歌は勅撰集に10首入集している。また、慈円の家集『拾玉集』には慈円との贈答歌群77首が見え、36首は頼朝詠である。勅撰集入集歌10首のうち、7首が慈円との贈答

歌に重なる。興味深いことに『拾玉集』にない勅撰集入集歌3首はいずれも羈旅の部に収められる。

○新古今集 羈旅歌

題知らず

前右大将頼朝

975道すがら富士の煙もわかざりき晴るる間もなき空の景色に

旅の途上、通り過ぎる富士の煙と区別のつかない、雲に覆われた空模様を詠む叙景歌。

○続古今集 羈旅歌

都に上るとて二村山を越えけるに詠める

前右大将頼朝

872よそに見し小笹が上の白露を袂にかくる二村の山

子 敏 関 今

遠いものと見ていた小笹原を今現実にかき分け、葉に置く白露を袂にかけて超える二村山を詠む。「二村山」は尾張国の歌枕。因みに同歌は『六華和歌集』羈旅¹⁵⁴⁸には鎌倉右大臣詠として載るが、実詠ならば、実朝詠の可能性は低い。

○続後拾遺集 羈旅歌

都より東へ帰り下りて後、前大僧正慈鎮のもとへ詠

みて遣はしける歌の中に

前右大将頼朝

575かへる波君にとのみぞことづてし浜名の橋の夕暮の空既に触れたように、上洛の際、頼朝は慈円と歌を親しく交わしている。『拾玉集』にある二人の贈答には、政治的背景

の故とも考えられるが、難解なところがある。それに比べる
と、この歌は平易と言えよう。「都へ帰る波にあなたにだけ
言づけました、浜名の橋から西に日が沈む夕暮の空に向いて」
という趣旨の詠を、東国に帰ってから贈ったというのである。
都で交流のあった人への挨拶という趣である。

以上の頼朝詠3首は、「富士」「二村山」「浜名の橋」とい
う歌枕を織り込み、義家詠同様、歌意をとりやすい羈旅歌で
ある。

頼朝の行動半径は、その息・実朝には比較にならぬほど広
い。平治の乱で伊豆に配流され、機を窺って挙兵、石橋山の
合戦では敗れるも、苦難を乗り越え、鎌倉殿として東国を統
治した。鎌倉を拠点として後、二度上洛している。実詠の羈
旅歌が詠まれるのに不思議はない。

一方、三代將軍実朝は、終生東国に在った。旅は、そのよ
うな人間にとっては実に縁のない世界であるように思われる
のだが、定家所伝本『金槐和歌集』には「旅」の部立があり、
24首の和歌が収められる。本稿では、その特質を考えてみ
たい。

定家所伝本『金槐和歌集』の旅歌

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
風雅	続後拾	続千載	玉葉	新後撰	続拾遺	続古今	続後撰	新勅撰	新古今	千載	詞花 三奏本	金葉	後拾遺	拾遺抄	拾遺	後撰	古今	
	離別			離別歌		離別歌			離別歌	離別歌	別	別離	別部	別	別	離別歌	離別歌	
	528 556			532 552		819 856			857 895	476 497	172 186	337 361	334 349	461 499	194 227	301 353	1304 1349	365 405
		29		21		38			39	22	15	25	16	39	34	53	46	41
	旅歌	羈旅歌	羈旅歌	旅歌	羈旅歌	羈旅歌	羈旅歌	羈旅歌	羈旅歌	羈旅歌				羈旅		羈旅歌	羈旅歌	
	899 959	557 600	757 858	1104 1246	553 607	662 724	857 943	1275 1329	494 539	896 989	498 544			500 535		1350 1367	406 421	
		61	44	102	143	55	63	87	55	46	94	47		36		18	16	

2、旅の表現

I 旅歌の伝統——二十一代集の概観

旅は和歌にどのように詠まれてきたか。まず、二十一代集の旅の歌を概観しておきたい。部立と歌数を表に示すと次のようになる。

21	20	19	18
新続古今	新後拾遺	新拾遺	新千載
離別歌	離別歌	離別歌	離別歌
881 913	844 865	736 757	735 761
33	22	22	27
羈旅歌	羈旅歌	羈旅歌	羈旅歌
914 1005	866 926	758 843	762 819
92	61	86	58

「離別」「別」は、旅の別れとして、羈旅歌の直前にあり、『古今集』から『新古今集』までの八代集には必ず収められる部立である。「拾遺集」「金葉集」「詞花集」には、「別」の部立はあるが、羈旅歌の部立がない。両方の部立があっても『古今集』『後撰集』『後拾遺集』は、「離別」「別」の歌数が「羈旅」よりも多い。これが「千載集」以降、逆転する。

そして、『新勅撰集』『続後撰集』『続拾遺集』『玉葉集』『続千載集』『風雅集』には、「離別」「別」の部立がない。(このうち「玉葉集」「風雅集」の部立は「羈旅歌」ではなく「旅歌」である。)留意すべきは「千載集」以降、羈旅歌(旅歌)が勅撰集に欠かせぬ部立として定着したことである。

勅撰集の羈旅歌・旅歌の詠歌傾向については、安田徳子に先行研究がある。安田は羈旅歌において『拾遺集』から見出すことの出来る題詠が、「千載集」以降、主流をなし、「自己」の体験の代わりにしばしば古物語や故事あるいは古歌の世界を利用した^③こと、「実詠の減少とともに、羈旅歌は全く形骸化してしまった^④」ことを指摘している。

鎌倉期には前時代に増して散文の旅の表現・紀行が多く書かれるようになるのだが、そのような時代の到来を見通すような平安末期の勅撰集『千載集』である。旅の歌の変遷史上、『千載集』は重要な位置にあると言えよう。『千載集』が成立した数年後に実朝は誕生している。

Ⅱ旅の表現類型——歌枕と都回帰

散文も視野に入れて、平安鎌倉期の旅の表現の特質をみておきたい。

旅の表現は伝統的に虚構と切り離せない。それは、表現類型の踏襲に関わってくる。^⑤

子 敏 関 今

平安鎌倉期の紀行の特色は、旅の記ではあっても記録そのものではない点にある。西欧や古代中国の紀行は、旅のガイドブックになり得るほど正確に、土地の特徴や、宿賃、船賃などが書かれ、実用的でもある。これに対し、平安鎌倉期の紀行は、現実の旅ガイドにはなり得ない。また、険しく厳しい自然と闘い、開拓していく探検記・冒険記にもなり得ない。なぜなら、この時代の旅の行程には枠組があり、紀行は、必ず和歌が詠み込まれる旅の情趣の表象だからである。その類型に歌枕訪問と都回帰の姿勢がある。

歌枕は起伏が穏やかに富む風光明媚な地形と、比較的温暖な気候ならでこそ育まれた文化であろう。どこまでも同じ風

景の続く険阻な岩山や広大な草原や砂漠、さらに一年中炎暑であったり、氷雪に閉ざされているような過酷な気候では、まずそのような発想は生まれえない。ある土地ある場所の特徴、独特の味わいに関わる共通概念・共通理解が歌枕である。従って、実際に旅をして訪れなくとも、歌枕さえ踏まえば旅の歌は詠める。題詠が成立する。すなわち、旅の世界とその情趣、旅人の心情は造型され得る。この意味で虚構である。

都回帰も平安鎌倉期の旅の表現には欠かせぬものである。旅の出発点と帰着点は都であった。都は政治・文化すべての中心であり、規範であった。絶対的価値観の基準と言っても過言ではない。旅先の珍しさ、面白さに心を動かされることはあっても、都中心の価値観は揺るがない。都を離れることは辛い。都から遠く旅の空にある間は侘しい。旅愁が詩的に表現されるのは、旅の歌も紀行も同様である。

ここで和歌表現に都への郷愁の例を見ておこう。実朝の時代に近い勅撰集、『千載集』『新古今集』各々の羈旅歌に、『都』の語例をみよう。題詠を太字で示す。

○千載集 羈旅歌（47首中7首）

（百首歌召しける時、旅歌とて詠ませ給うける）

512 さらしなや姨捨山に月見ると都に誰か我を知るらん

（藤原季通）

513 道すがら心もそらに眺めやる都の山の雲がくれぬる

(待賢門院堀河)

世を背きて後、修行し侍りけるに、海路に月を見て
詠める

516 わたの原はるかに波をへだてきて都に出でし月を見る

かな (円位法師)

東の方にまかりける時、行く先はるかにおぼえ侍り
ければ詠める

519 日を経つつ行くにはるけき道なれど末を都と思はばし

かば (藤原修範)

尾張国に知るよしありてしばしば侍りける頃、人の
もとより、都の事は忘れぬるかと言ひて侍りければ、
遣はしける

521 月見ればまづ都こそ恋しけれ待つらんと思ふ人はなけ

れど (道因法師)

(旅の歌として詠み侍りける)

534 草枕仮寝の夢にくたびか馴れし都に行きかへるらん

(藤原隆房)

心のほかなることありて、知らぬ国に侍りける時詠
める

541 かくばかり憂き身のほども忘れられて猶恋しきは都なり

けり (平康頼)

○新古今集 羈旅歌(90首中9例)

関戸の院といふ所にて、羈中見月といふ事を

931 草枕ほどぞ経にける都出でて幾夜か旅の月に寝ぬらむ

(大江嘉言)

旅の歌として詠める

936 もろともに出でし空こそ忘れね都の山の有明けの月

(藤原良経)

題しらず

937 都にて月にあはれを思ひしは数にもあらぬすさびなり

(西行法師)

旅歌として詠み侍りける

942 東路の夜半の眺めを語らなん都の山にかかる月影

(慈円)

(和歌所歌合に、羈中暮といふことを)

959 都をば天津空とも聞かざりき何眺むらん雲のはたてを

(宜秋門院丹後)

歌合しはべりける時、旅の心を詠める

971 日を経つつ都しのぶの浦さびて波よりほかの訪れもなし

(藤原兼実)

(述懐百首歌詠み侍りける旅の歌)

977 おぼつかな都に住まぬ都鳥言問ふ人にいかか答へし

(宜秋門院丹後)

詩を歌に合はせ侍りしに、山路秋行といへることを

982 都にも今や衣をうつの山夕霜払ふ鳶の下道（藤原定家）

熊野に参り侍りしに、旅の心を

989 見るままに山風荒くしぐるめり都も今は夜寒なるらん

（後鳥羽院）

「都」の語例を拾っただけでも『新古今集』の題詠が『千載集』に比べ、増えているのに気づかされる。このように、題詠が増えていくことは、必ずしも旅の歌の形骸化^⑥とばかりは言えないように思われる。確かに自身は動かさず想像し空想するばかりでは空疎な観念の遊戯に陥る危険性はある。しかし、一方、歌枕という都で醸成された共通概念・共通理解を基軸にそれを変容させていくのは、それだけにとどまらぬ創造の豊かさがあるように思われる。さらに作品相互が連関し、影響し合って心象世界を広げていく旅の表象は、日本文化の伝統の特質ではないだろうか。この傾向は文学のみならず、絵画にも共通する要素^⑦とは言えまいか。少々横道に逸れた。旅歌の都回帰に戻ろう。

紀行同様、羈旅歌にも心躍る旅の気分が詠まれることはない。都に待つ人がいてもいなくても、心細さ、孤独、物寂しさの表出がほとんどである。そこには明らかに都から離れた時間と距離を測って嘆くという類型がある。二十一代の『新続古今集』になると、旅は辛いものという捉え方がやや稀薄になるのだが、旅の情趣は、都回帰を基調とした寂寥と望郷

を中心に詠まれてきた。和歌表現における都回帰は歌枕訪問に並んで、まさしく散文の紀行の類型に重なる。これらは、共感性・共有性をもって都で醸成される旅の表出の伝統である。

しかし、実朝は都にいたのではない。伊豆・箱根に赴くことはあっても、終生東国を出たことはなかった。そのような歌人の旅歌にはいかなる特徴が見出せようか。

3、『金槐和歌集』旅部の構成

I 和歌の連鎖

旅歌に限らず、定家所伝本『金槐和歌集』の特色は、その配列にある^⑧。実朝自撰としか考えられないような配列意図は、時間の整合性（これは四季の歌にとりわけ顕著である）、背景の移り変わりや配分、語句の連鎖に明瞭である。和歌は一首でも充分鑑賞され得るが、配列によって家集全体の調和が生まれ、一首一首の和歌にはさらに命が吹き込まれる。

旅部全歌を挙げ、前後を見渡して、同語・同語句に■を、類似表現、対比表現に傍線を付す。（ ）内に貞享本の国歌大観番号を挙げ、配列の相違がわかるようにすると次のようになる^⑨。

512 玉鉦の道は遠くもあらなくに 旅とし思へば侘しかり

けり (564)

513 草枕旅にしあれば刈菰の 思 (ひ) 乱れていこそ寝られぬ (566)

514 旅衣袂片敷き今宵もや 草の枕に我がひとり寝む (567)

霧中夕露

515 露しげみならばぬ野辺の狩衣 頃しも悲し秋の夕暮 (573)

516 野辺分けぬ袖だに露は置くものを ただこの頃の秋の

夕暮 (574)

517 旅衣うら悲しかる夕暮の 裾野の露に秋風ぞ吹く (575)

霧中鹿

518 旅衣裾野の露にうらぶれて ひもゆふ風に鹿ぞ鳴くなる (576)

519 秋もはや末の原野に鳴く鹿の 声聞く時ぞ旅は悲しき

(577)

520 ひとり臥す草の枕の夜の露は 友なき鹿の涙なりけり

(578)

旅宿月

521 ひとり臥す草の枕の露の上に 知らぬ野原の月を見る

かな (579)

522 岩根の苔の枕に露置きて 幾夜深山の月に寝ぬらむ (580)

旅宿霜

523 袖枕霜置く床の苔の上に 明かすばかりの小夜の中山 (582)

524 しながらどり猪名野の原の笹枕 枕の霜や宿る月影 (583)

旅歌

525 旅寝する伊勢の浜荻露ながら 結ぶ枕に宿る月影 (584)

526 旅の空なれぬ埴生の夜の戸に 侘しきまでに漏る時雨

かな (581)

屏風の絵に山家に松描ける所に旅人数多あるをよめる

527 まれに来て聞くだに悲し山賤の 苔の庵の庭の松風 (589)

528 まれに来てまれに宿借る人もあらじ あはれと思へ庭

の松風 (590)

雪降れる山の中に旅人 (臥) したる所

529 片敷きの衣手いたく冴え冴えぬ 雪深き夜の峰の松風 (587)

(587)

530 暁の夢の枕に雪積もり 我が寝覚め訪ふ峰の松風 (588)

霧中雪

531 旅衣夜半の片敷き冴え冴えて 野中の庵に雪降りにつけり (584)

532 逢坂の関の山道越えわびぬ 昨日も今日も雪し積もれば (585)

533 雪降りて跡ははかなく絶えぬとも 越の山道やまず通

はむ (586)

二所へ詣でたりし下向に春雨いたく降りりしかばよめる

534 春雨はいたくな降りそ旅人の 道行衣濡れもこそすれ

(595)

535 春雨にうちそぼちつあしひきの 山路行くらむ山人

や誰 (594)

同語・同語句のくり返し、類似表現・対比表現への変化で和歌と和歌が滑らかに連鎖していく配列である。

II 配列構成

背景の季節は、定家所伝本『金槐和歌集』旅部の特質に大きく関連する。

勅撰集をはじめとした羈旅歌の季節に夏は少ないが、定家所伝本『金槐和歌集』旅部にも夏は皆無である。詞書のない冒頭512～514は季節が特定し難いが、後述するように秋と捉えられる。515～522の8首を加えると秋11首、冬11首(523～533)、春2首(534、535)。伝統的な旅愁の表現にふさわしい季節の配分と言えよう。ただし、季節の順序は、春秋冬ではなく秋冬

春である。

季節ごとに旅部の配列の流れを辿っておきたい。

i 秋

まず、詞書のない初めの3首をみよう。

512 玉銚の道は遠くもあらなくに旅とし思へば侘しかりけり

513 草枕旅にしあれば刈菰の 思(ひ) 乱れていこそ寝

られね

514 旅衣 袂片敷き今宵もや 草の枕に我がひとり寝む

旅の始まりである。512番歌は、いよいよ出発の趣である。

当時は他所で寝床を取るとは旅であった。これから行く道が遠いわけではないのだが、旅だと思いと心細いことだ―寂寥感が表出される。「玉銚の道ははるかにあらねどもうたて雲居に惑ふ頃かな」(新古今・恋四1248・朱雀院)に上の句が類似する詠である。歌の構造は「里離れ遠からなくに草枕旅とし思へばなほ恋ひにけり」(万葉・卷十二3148・作者未詳)に通じる。

513番歌は有馬皇子の悲痛な詠「家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」(万葉・卷二142)がまずは想起されるが、「野辺ごとに秋まつ虫の鳴く時は草の枕にいこそ寝られね」(千穎集25)に通じる旅寝の辛さを詠む。また、「刈菰の思ひ乱れて我恋ふと妹知るらめや人し告げずは」(古

今・恋歌一485・よみ人知らず)に重なる恋の心情を見逃せない。

514 番歌は、『玉葉集』旅歌1192に「題しらず」で載る。「さ筵に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(古今・恋歌四689/近代秀歌87・よみ人しらず)「あしひきの山下風の寒けきに今宵もまたや我がひとり寝む」(拾遺・恋三77)を想起させ、513同様、恋心を匂わせる。

以上、旅の冒頭3首の季節を示す景物はないものの、恋の情趣に重なる愁思が読み取れるのである。

羈中夕露

515 露しげみならはぬ野辺の狩衣 頃しも悲し秋の夕暮

516 野辺分けぬ袖だに露は置くものを ただこの頃の秋の夕暮

517 旅衣うら悲しかる夕暮の 裾野の露に秋風ぞ吹く

515 番歌は、「露しげみ野辺を分けつつ唐衣濡れてぞ返る花の雫に」(新古今・秋歌下446・藤原頼宗)「草枕結びさだめむ方知らずならはぬ野辺の夢の通ひ路」(新古今・恋歌四1315・藤原雅経)の先行歌に同語句・類似語句をみるが、歌意は実朝独自。

516 番歌は上の句の歌意を「秋の野の草も分けぬを我が袖のもの思ふなへに露けかるらむ」(後撰・秋中316・紀貫之)に学んでいるかと思われる。「ただこの頃の秋の夕暮」の用例

は、「しをりしてつらき山とは知らざりきただこの頃の秋の夕暮」(夫木・秋部四5513・如願法師)以外には見られない。

517 番歌の「うら悲しかる」の用例には、「浅茅原玉まく葛のうら風のうら悲しかる秋は来にけり」(後拾遺・秋歌上236・惠慶法師)がある。実朝詠の「うら」衣「裾」は縁語。

秋の夕暮時はさびしいものだが、旅にあつてはなおのことである。野辺の露で衣が濡れる心細さ。さらに風まで吹いて心が揺れる。

羈中鹿

518 旅衣裾野の露にうらぶれて ひもゆふ風に鹿ぞ鳴く

なる

519 秋もはや末の原野に鳴く鹿の 声聞く時ぞ旅は悲しき

520 ひとり臥す草の枕の夜の露は 友なき鹿の涙なりけり

「鹿ぞ鳴くなる」(518)「鳴く鹿の声」(519)「友なき鹿の涙」

(520)と、鹿を身近に捉える表現である。

518 番歌は、前歌の「旅衣」「裾野の露」を受け、「裾」「うら」「ひもゆふ」は縁語。「ひもゆふ」は「紐結ふ」と「日も夕」をかける。「唐衣ひもゆふ暮になる時は返す返すも人は恋しき」(古今・恋歌一515・よみ人しらず)に歌意は通じようが鹿を配して旅愁を表現している。

519 番歌は、『夫木和歌抄』秋部三4739に「御集、羈中鹿」の詞書で載る。「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は

悲しき」(古今・秋歌上215／近代秀歌47・よみ人しらず)を踏まえた詠。三句以下を、「秋」から「旅」に変えただけの大胆さに、これを本歌取りというべきか否か躊躇されるが、風情は全く異なる詠となっている。

520番歌の構造は「夜もすがら草の枕に置く露は故郷恋ふる涙なりけり」(金葉・恋部上385・藤原長実)に重なる。

旅の途上で聞く鹿の声にうら悲しさはいつそう募る。そして、夜の帳が降りる。露の置く旅寝は、自身も仲間のいない鹿のように感じられ、涙を誘う。

旅宿月

521ひとり臥す草の枕の露の上に 知らぬ野原の月を見る

かな

522岩根の苔の枕に露置きて 幾夜深山の月に寝ぬらむ

やがて月が出る。521番歌は「今日はまた知らぬ野原に行き暮れぬいづれの山か月は出づらむ」(新古今・羈旅歌956・源家長)詠から時間が経った風情の歌意である。また「あしひきの山路の苔の露の上に寝覚め世深き月を見るかな」(新古今・秋歌上398藤原秀能)に、歌の構造、それに伴うリズムが類似する。方角もわからぬ野原では月の出る方向もわからなかったが、ひとり臥して眺めることになる。

野辺ばかりではない。旅の空で深山の月の下にもどれほど寝たことか。522番歌は「草枕ほどぞ経にける都出でて幾夜か

旅の月に寝ぬらむ」(新古今・羈旅歌931・大江嘉言)に学んでいようが、都回帰は捨象されている。

本論2—II旅の表現類型—歌枕と都回帰で例に挙げた『千載集』『新古今集』にみるような都回帰の姿勢は実朝の旅歌には皆無である。月を見て望郷する類型(千載集「512さらしなや姨捨山に月見ると都に誰か我を知るらん」「516わたの原はるかに波をへだてきて都に出でし月を見るかな」「521月見ればまづ都こそ恋しけれ待つらんと思ふ人はなけれど」新古今集「931草枕ほどぞ経にける都出でて幾夜か旅の月に寝ぬらむ」「936もろともに出でし空こそ忘れね都の山の有明けの月」「937都にて月にあはれを思ひしは数にもあらぬすさびなりけり」「942東路の夜半の眺めを語らなん都の山にかかる月影」も、実朝詠には無縁である。

ここで秋の旅を終わる。時間序列は実に正確である。旅の始まりから、夕暮の旅愁、鹿に催される寂寥感、そして月を友として過ごした夜へと配列されている。

ii 冬

旅宿霜

523袖枕霜置く床の苔の上に 明かすばかりの小夜の

中山

524しながどり猪名野の原の笹枕 枕の霜や宿る月影

季節は冬に移る。冬の旅寝に冷たい霜が降りる。523番歌

は『夫木和歌抄』雑部二871に、「御集、旅宿霜」の詞書で載る。歌枕「小夜の中山」は東海道の難所である。寒い難所の旅寝を詠んだ歌には「夜な夜なの旅寝の床に風冴えて初雪降れる小夜の中山」（千載・羈旅歌502・藤原実行）「岩が根の床に風を片敷きてひとりや寝なむ小夜の中山」（新古今・羈旅歌962・藤原業清）などがあるが、実朝の表現「明かすばかり」は新鮮。

続けて524番歌には歌枕「猪名野」（笹原で有名）が詠み込まれる。「猪名野」と霜を詠んだ先行歌には、「初霜は降りにけらしなしながどり猪名の笹原色変わるまで」（新後拾遺・冬歌483・藤原俊成）がある。勅撰集の「笹枕」の例は『続後撰集』以降に8例をみるのみ。「笹枕」に「月」が取り合せられる歌に「露結ぶ野原の庵の笹枕幾夜か月の影になるらむ」（続拾遺・羈旅歌682・平時村）があり、さらに「猪名」が詠み込まれる歌に「笹枕猪名の夜半に仮寝して故郷遠き月を見るかな」（新後拾遺・羈旅歌906・道成法師）がある。

旅歌

525 旅寝する伊勢の浜荻露ながら 結ぶ枕に宿る月影

『統古今集』羈旅歌892に「旅歌中に」の詞書で載る。霜の笹枕に月が宿る前歌に並べて、露の枕に月が宿るという趣向。浜辺の旅寝を詠んだ例には「神風や伊勢の浜荻折伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に」（新古今・羈旅歌911・よみ人しらず）

がある。

旅宿時雨

526 旅の空なれぬ植生の夜の戸に 侘びしきまでに漏る時雨かな

「夜の戸」は貞享本では「夜の床」と表記。定家所伝本を底本にした新潮日本古典集成の『金槐和歌集』も「夜の床」と表記、誤記とみたか。『夫木和歌抄』雑部十八¹⁶⁹³⁵に「御集」の詞書で、第三句を「夜の床」と表記して載る。植生の宿の寝床が雨に濡れる状況を詠む先行歌に「彼方の植生の小屋に小雨降り床さへ濡れぬ身に添へ吾妹」（万葉・卷十一2691・作者未詳）があるが、この場合、原態通り、「夜の戸」ととる。勝手のわからぬ粗末な狭い小屋の戸から冬の雨が漏れてくる旅寝も楽ではない。

屏風の絵に山家に松描ける所に旅人数多あるを詠める
527 まれに来て聞くに悲し山賤の 苔の庵の庭の松風
528 まれに来てまれに宿借る人もあらじ あはれと思へ庭の松風

冬は旅寝の詠が続いたが、屏風を見ての詠に転じる。「まれに来て」「庭の松風」を繰り返す対の歌。屏風に描かれるわびしい山家に想像をめぐらす。

527番歌と歌意は異なるが、類似表現は「まれに来る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ」（新古今・哀傷

796・藤原俊成)にみえる。

528番歌は「まれに」を反復して頭韻を踏む。下の句は「幾歳の春に心を尽くし来ぬあはれと思へみ吉野の花」(新古今・春歌下100・藤原俊成)と同じ構造。

雪降れる山の中に旅人(臥)したる所

529片敷きの衣手いたく冴え侘びぬ 雪深き夜の峰の松風

530暁の夢の枕に雪積もり 我が寝覚め訪ふ峰の松風

屏風歌は、再び旅寝。前歌二首の「庭の松風」を受け、「峰の松風」で結ぶ対の二首。

子 敏 関 今

529番歌は、澄み冴えた寒気と松風が「琴の音を雪に調ぶと聞こゆなり月冴ゆる夜の峰の松風」(千載・雑歌上1002・道性法親王)「冴え行けば谷の下水音絶えてひとり氷らぬ峰の松風」(続拾遺・冬歌425・藤原忠良)に通じよう。

530番歌は、定家所伝本『金槐和歌集』春部15番歌「梅が香を夢の枕にさそひきて覚むる待ちける春の山風」に似通う手法だが、雪が積る夜に旅寝をして峰の松風を聞く状況の先行歌は見当たらない。後代の歌に「おのづから都に通ふ夢をさへまた驚かす峰の松風」(続拾遺・雑歌上1137・藤原基平)がある。

冬も深く、雪が降る山中に在る旅人の心境を詠む。

霽中雪

531旅衣夜半の片敷き冴え冴えて 野中の庵に雪降りけり

532逢坂の関の山道越えわびぬ 昨日も今日も雪し積もれば

533雪降りて跡ははかなく絶えぬとも 越の山道やまず通はむ

531番歌の類似表現に「さ庭に夜半の衣手冴え冴えて初雪白し岡の辺の松」(新古今・冬歌662・式子内親王)がみえる。「野中の庵」には「何となく見るよりもの悲しきは野中の庵の夕暮の空」(拾遺愚草588・藤原定家)のように、人里離れたさびしい情景を想起させる。実朝歌は、寒い冬、雪降る庵にいる孤愁を詠む。

532番歌は、「山の峽そこも見えずおとつひも昨日も今日も雪の降れば」(万葉・卷十七3946・紀男梶)に下の句の構造が似る。

533番歌は「君が行く越の白山知らねども雪のまにまに跡は訪ねむ」(古今・離別歌391・藤原兼輔)に類似する。

冬の旅歌は、527 528の屏風歌を除けば、531番歌までがすべて旅寝を詠む。旅の歌でありながら動きがなく、冬籠りの感が強い。532番歌では逢坂の雪の山道を越えわび、533番歌は越の山道の地名にちなんで越えようとする意思が詠まれている。これから動きが出ようかというところで冬の旅が終わる。

iii 春

二所へ詣でたりし下向に春雨いたく降りしかばよめる

534春雨はいたくな降りそ旅人の 道行衣濡れもこそすれ

535 春雨にうちそぼちつつあしひきの 山路行くらむ山人
や誰たれ

露霜、時雨、風、雪に難儀する冬から一転して春。何と暖かく、明るく感じられることか。題詠と屏風歌で構成されていた秋冬の旅から、春の東国の旅は実詠に転じる。

534 番歌は『夫木和歌抄』雑部十五15576に「二所へ詣でたりし

下向に春雨のいたく降りけるに」の詞書で載る。同語句は先行歌「春雨はいたく降りそ桜花まだ見ぬ人に散らまくも惜し」(新古今・春歌下110・山部赤人)「音に聞く高師の浦のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ」(金葉二・恋部下469・一宮紀伊)にみえるが、歌意は実朝独自。

535 番歌は「あしひきの山に行きけむ山人の心も知らず山人や誰」(万葉・巻204294・舎人皇子)に学んでいよう。

歌人としての実朝の姿勢は、基本的に鎌倉の將軍ではなく、後鳥羽院廷臣であった。^①京を中心とした詠歌姿勢で定家所伝本『金槐和歌集』は構成される。ただし、地域性が皆無なわけではない。春部にも勝長寿院などの実朝の生活圏が垣間見られるが、東国という地域性が詠まれるのは、雑部であり、実朝の面目躍如とした伸びやかな和歌が豊富である。このような傾向を考え併せると、旅部を締め括る旅に、実朝の生活圏を選んでいるのは象徴的である。

二所詣での折に降りだした春雨。534 番歌は、ひどく降るな

よ、道中着が濡れてしまおうではないか、と詠み、535 番歌は春雨に濡れながら山中を行く人物に焦点を当てる。この歌には「春雨の中を濡れそぼちながら歩み行く山人を仙人に見立て私は仙人を見たのではないかと、侘しい旅路で気持ちを明るく引きたてようとして興じた歌」^②、「万葉の句法を借りているが、一首は箱根山中を旅する者の弾んだ気持が、前歌よりもっと端的にうたわれている。四、五句の問いかけは、万葉の本歌の場合以上に疑問法の効果を發揮している。この歌の「山人」も、無論、作者自身(併せて、伴の者達)を指している。「私は誰でしょう」というあの心理である」^③等、様々な解釈を許容する。侘しい旅路というよりは、春雨の旅の光景そのものを楽しんでいる風情であり、「山人」は、実朝自身というより、遠景の人物ともとれる。春雨に濡れることを厭う実朝一行と、そのようなことには頓着せず山を行く人の対照ともとれよう。想像を楽しませる一首である。

Ⅲ 季節の配分と部立の連鎖

旅部が、春に始まるのではなく、秋に始まり春に終るのは偶然ではない。

定家所伝本『金槐和歌集』は和歌と和歌を連鎖しつつ配列されているが、そればかりではない。部立と部立の連鎖にも配慮されていると考え得る。

冒頭3首がとりわけ恋の情趣を漂わせているのを看過できない。旅部の直前に位置するのは恋部である。いきなり異質の詠を配するのではなく、冒頭部には旅愁に恋の情趣も漂わせて、滑らかに連結させているのではあるまいか。

さらに、旅部末尾の春の季節は、次に位置する雑部の連結するのである。雑部には冒頭歌

海辺立春といふ事をよめる

536 塩釜しほがまの浦うらの松風霞まつかぜむなり 八十島やそしまかけて春はるや立たつらむ

に始まる明るい雑春の世界が展開する。

IV 定家所伝本『金槐和歌集』旅部の特徴

以上に述べてきたように定家所伝本『金槐和歌集』旅部は、周到に季節が配分され、和歌と和歌が連鎖して配列され、恋部から旅部へ、旅部から雑部へと、前後の部立にも関連付けて構成されている。

曾曾祖父・義家、父・頼朝の羈旅歌に必ず詠み込まれた歌枕だが、実朝歌には多くはない。24首中、「小夜の中山」(523)「猪名野」(524)「伊勢」(525)「逢坂」(532)「越」(533)の5例にとどまる。定家所伝本『金槐和歌集』では、歌枕がむしろ旅歌以外で縦横に詠み込まれる傾向がある。

勅撰集の離別・別に相当する、旅人と残る者との別れの場面、その心情はなく、もっぱら旅人の内面に終始する。旅が

辛いものであるという捉え方は踏襲され、とりわけ529番歌531番歌に顕著なように、全体としてひとりであることが強調される。孤独・寂寥・愁思・旅愁という旅の情趣を表現する伝統は充分に咀嚼され、自在に表現されている。旅が内面で造型された心象として表出される点は、中央歌壇の歌人たちに共通するが、実朝には都回帰の姿勢はない。先行の羈旅歌を学びつつ都回帰は受容されなかった。

秋に始まり、冬を経て春に終る構成には歌数も配慮され、秋の旅と冬の旅の配分は同数の11首、春の旅2首。春の旅にいたるまでは題詠と屏風歌で構成される。東国を舞台にして詠歌内容が一転する実詠の春の旅の配置は実に効果的な末尾である。

4、おわりに

京の歌壇から遠くに在って、独学で和歌を学んだ実朝は、羈旅歌が部立として定着した『千載集』、続く『新古今集』の時代の息吹を受けて育った。しかし、東国に在ることは限界がある。また一方、東国に在ればこそその新しさを生む可能性もある。以上に論じたように、それは旅部にも見出せる。

旅とは、王朝人にとっては、都を出て都に帰ることであった。中央から周辺へ、周辺から中央へという旅の行程ゆえ、

歌枕が生きてくる。実詠であろうと題詠であろうと、勅撰集をはじめとした和歌や、京の中央歌壇にある歌人たちの旅の詠に、それは自明の事として潜在している。旅の心象には共通するものがある。

しかし、そのような共通項は、東国しか知らぬ実朝にはない。歌人としての実朝の姿勢は、將軍ではなく、後鳥羽院廷臣であり、京の視点から詠ずることが多いのだが、実朝の間認識は京の歌人と同じではない。東国から出ることのなかった実朝には旅の出発点も帰着点もない。歌枕訪問の姿勢が稀薄であり、都回帰が皆無なのは当然であろう。

末尾歌2首の実景歌は、それまでとは別世界を見せて明るく開ける詠みぶりである。東国を舞台にした地域性と言いつ、謎めいた最終歌と言いつ、実朝ならではの伸びやかさを感じさせる安定した個性あふれる春雨の詠である。

本論冒頭に掲げた曾曾祖父・義家、父・頼朝の羈旅歌に比べると、実朝の独自性はさらに浮き彫りになろう。

(教授 日本文学)

注

- ① 本論中の勅撰集の和歌の引用は、『新編国歌大観』(角川書店)に拠り、私に表記する。
 ② 安田徳子『中世和歌研究』(和泉書院1998)

- ③ ②の著書第一章第一節旅歌の変遷一「実詠から題詠へ」
 ④ ②の著書第一章第一節旅歌の変遷二「旅人のいる風景」
 ⑤ 今関敏子「旅する女たち―超越と逸脱の王朝文学―」(笠間書院2004)の序および跋
 ⑥ 今関敏子『仮名日記文学論―王朝女性たちの時空と自我・その表象―』(笠間書院2013)第2章第1節および第2節
 ⑦ ④に同じ。
 ⑧ たとえば、江戸中期の琳派の系譜を生んだ画家、尾形光琳の『燕子花図屏風』が『伊勢物語』以来、杜若の咲く沢として歌枕になった八橋に触発されていることなどがあげられる。
 ⑧ 今関敏子『金槐和歌集の時空―定家所伝本の配列構成』和泉書院2000
 ⑨ 本論中における定家所伝本『金槐和歌集』の引用は、今関敏子『実朝の歌―金槐和歌集訳注』(青簡舎2013)に拠る。
 ⑩ 樋口芳麻呂『金槐和歌集』(新潮日本古典集成) 1981
 ⑪ ⑧に同じ。
 ⑫ ⑩の頭注。
 ⑬ 鎌田五郎『金槐和歌集全評釈』風間書房1977